

寺報 善巧

発行
〒938 富山県下新川郡
宇奈月町浦山497
白雪山 善巧 寺
☎宇奈月 0765(65)0055

永代祠堂会 説教 里村了学師

七月十四日〜二十日

寺
ごよみ

七月

一日 お講・音沢

永代祠堂会

七月十四日から、恒例の祠堂経がつとありますが、今年も次のような特別法要を勤修しますので、ご縁のある方は是非お参り下さいますように。

- 一四日昼一時 総代物故者法要
- 一五日昼一時 白鶴会物故者法要
- 一六日朝十一時 お講 中陣
- 一七時 寺族物故者法要
- 一七時 戦没者追弔法要
- 一八日昼一時 本山御助成会
- 一九日昼一時 内陣法名法要
- 二〇日昼一時 内陣法名法要

説教 里村了学師



男先生と雪ん子たち - 4月12日上京前日にうつす -

七月は祠堂会です。祠堂会は門徒全体のご法事です。寺報四十六号を見ますと、今年一周忌を迎えられる家庭が十二戸、又、五十周忌を迎えるのが三十九戸あります。何百年前の祖先迄迎えるなら、どこのお宅でもだれかの年忌に当たっているでしょう。

「この身は、いまは、とときはまりて候へば、さだめてさきだちて往生し候はんずれば、浄土にてかならずかならずまゐらせ候ふべし。あなかしこ、あなかしこ。七月十三日親鸞 有阿弥陀佛 御返事。」

これは、親鸞聖人の御消息の一部です。「もう年を取った。恐らく私の方が先に往生するだろう。お浄土で、必ず必ず待つているよ。」と門弟の有阿弥陀佛と云う人へ書き送っておられます。

皆様方の祖先から代々の亡くなられた方の法名は、全部、善巧寺の過去帖に誌されています。その方々が、みんな、今、お浄土で待つてい

ると呼びかけて下さっています。この呼び声にに応じて、善巧寺本堂に門徒一同相寄り相集うてつとめるのが祠堂会です。私などが未だ知らぬ昔は、善巧寺の祠堂会は一ヶ月にわたって行われたそうです。

一ヶ月あれば、どの家の仏さまの命日も含まれていて銘々都合のい

祠堂会へどうぞ

い日に御参り出来るわけです。農業のやり方も手順も今日とはまるで変っていた頃で、七月は農閑期お参りには一番都合がよい時で、夏物の野菜苗や種子を商う店が出て、お参りの帰りにそれらを求めたということです。さぞ賑やかなそして風流な光景だったことでしょう。当時、電車も自動車もない頃で、祠堂会詣りは、一日掛りの御仏事だったと思われま

す。その昔から、明治・大正・昭和と移り、その昭和も今年には六十三年です。時代が移ると共に、人間の生活のテンポも当然早くなり、男も女も、青年も壮年も、多忙な日々を生活のために送らねばならず、亡くなった方々のことを静かに偲ぶ時間は少なくなつてしましました。祠堂会の期間も、今日では一週間に短縮されました。此の一週間の中、せめて、一日を善巧寺にお参りになって、称名念仏する人の輪を広げて行くことが、浄土真宗門徒のつとめであると共に、心の豊かさがつてつとある現代社会に暖かい信仰の灯をともす浄行となるのではないしょうか。

住職 雪山 俊之



自然法爾を味わう

②

行信教教授

高田慈昭師

親鸞聖人の末灯鈔のお言葉をみますと、まず自然という言葉の解釈ができてます。「自」というのは自ずから、行者のはからいにあらず、然というのには然らしむる、行者のはからいにあらずという、どちらも行者のはいからいにあらずという風にのべられています。法爾というのは「如来の御誓いなるが故に然らしむるをいう」とのべられています。

この自然という文字、自という文字はみずからとおのずからという二通りの読み方があるわけですが、みずからという時は自分自身ということ、親鸞聖人は、五会法事賛の観音勢至自來迎、観音菩薩と勢至菩薩が、自ら來迎したもうという言葉をこ解釈され、二菩薩みずから私共、念仏者を迎えて下さるという云い方をされています。ところがその後には聖人は、また自というは自ずからというご解釈され、おのずからという時には自然という事である。阿弥陀如来のお救いが行者のはからいをはなれて、向うからしからしめて下さるという働きであるという風に他力ということをおあらわされて

います。今は自というのはいみずからという意味ではなしにおのずからという意味である。おのずからというのはい何故、行者のはからいにあらずというのかといえます、自という字、これは「より」という字でもあります。今はあまり使いませんが○年○月○日より○日にいたる、という時にこの字を使っています。ものがはじまるものということですが、又、「より」というのは「從」、こちらが動かなくとも向うから動かん私を抱きとて下さる。如来さまの方から全くはかうて下さるから、こちらからは毛すじほどもはからう余地がない。こちらから動いてゆくことではありませんから、行者のはからいにあらずというわけです。

太陽というのは向うにあるけれども、光はここにどいています。そして私達を照らし、私達の暗を破り、又、育てて下さる。向うからの働きでじつとしてあるままだ、こちらは光をいっぱいあびている。向うから近づいて、この煩悩の世界にいきいきと働いて、この私を

おさめとて下さる。こちらの方は素直にこれに従うより他はない、大きなめぐみであるなと仰いでゆく他はない。だから行者のはからいにあらずというのであります。向うからの働きでありますから、然という字は、またこれ然らしむるといいます。

親鸞聖人は必ずという字を必得往生とおっしゃっています。善導大師は、南無阿弥陀仏でどうして往生できるか、それは南無阿弥陀仏の中に、願と行がちゃんとこもっている。仏のさとりにいたる願と、仏のさとりにいたる行が、全部、南無阿弥陀仏におさまってあるから、どんな凡夫でも、南無阿弥陀仏一つで必ず往生を得るとおっしゃった。

善導大師の頃には、お念仏の教えを知らないで、凡夫の唱える位

はからいなしすべて如来の...

のお念仏で、どうして仏になれるかと、念仏の教えをけなした人達が多かった。そこで善導大師が憤然と立ち上りましてね。そうではない、お念仏一つによって凡夫が救われてゆくのである。そのわけをいうなら、南無というは帰命である。またこれ発願廻向の義なり、如来の願いが私の所にどいて、私が仏になる願がちゃんとこなえられていく。しかも、阿弥陀仏は即ち行といえり、阿弥陀仏という中に、この凡夫を仏にする行のありだけがこもっていて全部私のところに、信となり、念仏となつて浄土へむかわしめて下さる大

きな働きがある。

お寺の垂れ幕にありましたな、「法体大行」。如来の行が私の行になつて下さってある。如来さまが苦勞して仕上げて下さった行のありたけが、私の信となり、行となつて下さる。信心という事は、如来の大願大行が私のところへとどいて下さったということですね。

浄土真宗に行があるかと云われた時、私達は堂々と大願大行という行があります。それが私の体を通して出ておつて下さる南無阿弥陀仏の一声一声の無上の功德が躍動しているお念仏なんだということ、私達は、親鸞聖人の教えを通して味わっているのです。

法然上人は選択本願のお念仏とおっしゃっています。そのようにお念仏で凡夫が間違ひなく救われてゆくということ、はじめて道

理をもつて示されたのが善導大師必ず往生をうるといことが如来の自然法爾であるから、その道を歩む人間になさしめたものであります。

庄松さんでしたかなあ。友達が病気で寝ていました。病気をすると心が不安で、ひよつとして悪くなつて死ぬんじゃないかと庄松さんに仏法のお話をしてほしいというので、その友達の家へ見舞にゆきました。そしたら庄松さん、病人に話でもするかと思うと何もしないで、隣の部屋のお仏壇の前に座つて、おあかりつけておつとめをするんです。長い長いおつとめを

ゆつくりゆつくりしてありまして、仲々おわらない、病人がいらいらしてお前をよんだのはおつとめをしてくれということではない、早く私の枕元へきて早くお話をしてくれという、ここに大悲の如来さまがお立ちになつて居るじゃないか、この如来さまが正覺を成就して私のところへ南無阿弥陀仏ときて下さつておるのに何が足りないならあ、願力自然の働きで私のところへ南無阿弥陀仏となつて下さりましておつて下さる親さまが、ちゃんと私たちを迎えになるのに、何が足りない」と云うとナモミタフツとお念仏しながら帰つていったんです。

この病人の友達があとから考へてなるほどなアとわかつたんですね。何かありがたい心になろう、自分の不安を破ろうと思つて、それに、はからいをした。人生の矛盾や、人間の不安は人間の力で破ることはできません。くよくよした妄念や不安が最後までなくならないのが本當の姿です。しかしその不安のままが、如来さまの確かな法の中にそのままだかれ救われておるところに、ゆるぎない安心が与えられておるのです。

おのずから然らしむるということの言葉を私達は本當にかみしめて味わわっていたら、「このままだよかつたなア」「このままだよかつたなア」「このままだよかつたなア」と、心の底から暗れ暗れと念仏を申すより他にはないのであります。

雪ん子劇団ことはなんと 60人!

十周年を目前に元気に始動

KNBも密着取材

お寺の「雪ん子劇団」は、今春の新メンバーを加えて、只今六十人！毎週月曜日の境内や本堂からは「アイウエオ カキクケコ サンサンサンサン太陽さん」と元気ハツラツの声が続きます。今年、男先生の入



院という事で、四月は劇団もお休みでしたが五月からは、女先生が東京の病院からトンボ返りで指導。そして、どうしても都合がつかない時もありましたが、なんと、うれしいことに、六年生の子供たちが「ぼくたち、わたしたちがリーダーになって、しっかりやろう!」と立ち上がり、りっぱに自主練習をやっています。成長したなあと思えます。

そして、今年、雪ん子が創設されて十周年/来春の記念公演をめざして、大いにがんばりたいところ。予定では、この十年の劇団の歩みをふり返った記念出版も計画され、夢を育てる会も、ヤル気満々の構え。そんな中で、KNBは、ヒューマンドキメントの番組



先生留守でも自主練習

組の取材対象に、雪ん子を取り上げ、この一年間、毎週の練習や、子供たちのふれ合いや、成長、そうしたのを見つめてゆこうと、密着取材を続けて下さっています。また、雪ん子は、七月十日、富山本願寺で行なわれる、北陸ブロック仏教壮年大会に出演が決まっております。ご門主や北陸三県の壮年会の皆さんに熱演を観ていただくことになっています。この日はちょうど宇奈月町の青年祭で、出演依頼があったのですが、富山の方が六カ月前からの予約でしたので、やむなくお断りしました。宇奈月の皆さんには、夏の公演で楽しんでいただこうと思っています。とにかく、十周年を迎える雪ん子劇団に、みなさん、熱い声援を送って下さいますように。心からお願いたします。

雪ん子劇団

ビデオ児童劇 第3巻 カラー 30分
 頒価 5,000円
 (送料共)

昨秋、北日本地域社会賞を受賞した、ことばの教室「雪ん子劇団」が、さわやか演技であなたに贈る!



原作・阪田寛夫、劇団四季上演の台本を子供版に脚色して贈る感動のミュージカル!

ミュージカル

『桃次郎の冒険』

桃太郎の弟の桃次郎が鬼ヶ島でもらった宝物は何だったのか?

発売中

第一巻 「ことばあそびうた」
 第二巻 「うちのとうちゃんえらいんだ」
 第二巻 子供民話劇「ちづる」

お求めは
 頒価5000円と、テープのサイズ(VHSカセット)を明記して、左記へ

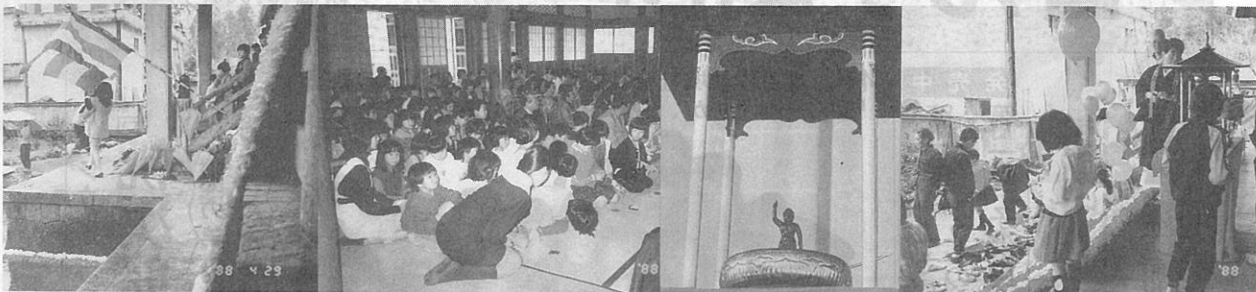
〒938 富山県下新川郡宇奈月町浦山497
 白雪山善巧寺内 雪ん子劇団

中 ようこそ



4月29

はなやか にぎやか 花の誕生会



雨の ようこそ



ワッハッハ, アッハッハ 野休み落語会



小三治さんはオートバイで



翌日一行は能登へ



大成功で世話役カンバイ /



会場の下見



雨の中永さん一行ご到着 /

若院入院 大手術

寺の若はん、えらいことになりました、東京築地の国立がんセンターで、五月十七日に大手術。完治をめざして闘病生活を送り、六月二十七日やつと退院。何かとご心配をおかけして申し訳ありません。

赤光白光

月一回この欄に執筆させていただくようになってから四年になる。自坊の書齋で四季折々の庭の草木のうつろいをながめながら書くことがほとんどだが、締め切りの関係でいろんな所で書くこともある。インドのブダガヤでカッコよくだったり、新幹線の中や、講演先の宿坊でだったり、▼で、今回はめったにない所で、ということになった。東京・築地の国立がんセンターの病室からなのである。先月この欄の原稿を出した翌日に、直腸ガンとわかり、急遽入院。いま手術を待っているところだ。なかなかの迫力で、果たして来月は…と考えるとおだやかではない。無常、生死、後生の一大事などの問題がひしひしと実感できる▼そんな中で、ビハール運動の裏返しといおうか、安らぎを与える立場から、患者側に身を転じてみると、思いもよらずに、喜びや発見がある。ア

〈病院でのお見舞いの一言〉

ようこそ ようこそその気持ちで：

— 女優 浜 美枝さん



浜さん 入院中たびたび

もちまへの活力で テキをうち負かして下さい！

— 脚本家 多岐映一さん

— 俳優 金田龍之介さん

— ビジュアル 80 関口さん

— 門徒 嶋田勲さん夫婦

▲手術の前日 須田さんも お見舞いに



お盆には帰って：

— 門徒 山本浅吉さん

冷たく悟った 色即是空 多情一切過去の夢：

— 産経新聞重役 山路昭平さん

赤光白光

御見舞 御礼

若はんは私共の光、力です。ガンバッテ下さい。

— 門徒 大藪守、節子夫妻

東京で食事を、ぜひ一度 仏さんが助けよか、助けんとかかと、迷ってるそうやで。

— 産経新聞 中川 朗さん

早く父のためにお経をあげて

— 魚津 谷口久美子さん

— 清河宗忠さん



いよいよ手術 5.17

早くお元気な姿を：

— 神子一英、真さん

次の本願寺新報、たのしみにして

随 病！！

— 荻生 国香悠子さん

術後は運動よ！

— 八尾聞名寺 霧野雅磨さん

— プロボウラー 須田開代子さん

病院の西日にめげず 葱坊主

— 入船亭扇橋師匠

西日にも負けずにはとけおはしま

— 映画監督 松林宗恵さん

— 映画監督 松林宗恵さん

— 映画監督 松林宗恵さん

— 映画監督 松林宗恵さん

— 映画監督 松林宗恵さん



術後ベッドで本の校正

赤光白光

グワラ、グワラ、グワラン…移動ベッドがガーン回廊を駆けめぐる音なのか、看護婦の押す包交(ほうこう)車のゆれる音なのか、それともだれかが私を呼んでいる声なのか…とにかくオモチャ箱をひっくり返したような騒ぎの中で麻酔からさめたようだった▼生還というのだからいいや自分がこの世に生まれてきたときも、こんな感じじゃなかったか？それなら、これはやつぱり、第二の誕生か。人生五十年、まったく、自然入風に生きてきて、ここへきて現代医学によつて、医療人に生まれかわった。生かされて生きる—ありがたい、おかげさまでとよろこばねばなるまい▼がしかし、凡夫というのとはさげないものだ。意識がもどれば、ドンチッチだ。そう、貧(どん)、瞋(しん)、癡(ち)。「がんといわれて」(文化出版社)の著者、女子プロボウラーの須田開代子さんが書いているのだが、すいぶんて本人ガンコで気の強い患者だったらしく、閉口した主治医の先生が「これでも読んでなさい」とベッド脇へ貼ったのが、貧・瞋・癡、だったそうだ。須田さん、ナンノコッチャワカランままに、闘病中、こ

月曜。晴。久しぶりの快晴。梅雨はこれからなのに来るで梅雨明けのような気分になる。えびねが終り、雪の下が点々と白い花を見せはじめている。朝食後、早速上京の準備。長岡経由上野着が二時。築地に車で直行。「国立がんセンター病院」と横書された玄関に着く。8日病棟にエレベーターで昇る。若院が、手術を受けてから丁度三週間目に当る。未だ点滴を受けているが、元気に応対出来る。術後の経過のあらましを娘が書いて張ってある。麻酔がとけた時間。初めてベッドを降りて立った日。其の他、専門的術語を交えて書いてある。リハビリにあたるのか、

り、診療券の説明書に「この券はこれから何年も使えます」という何でもない一言に、明日はないと思う心がホッと晴れたり：▼そろ、四十八願の中でも、これまで素通りしていた「諸根具足」の四十一願や「衣服自然」の三十八願。強い力をさずかる「那羅延身」の二十六願にほれどと安らぎを覚えたり。そしてもちろん「必至滅度」の十一願に、そうだったそうだったとなすかせていたたくなけだ、サテ、手術後、麻酔がさめたら、一体どんな凡夫のはからいをするのやら：できれば、来月、私事で恐縮だが、続報をこの欄で、と思う。

毎日廊下を幾回りか歩かねばならぬと笑っている。次第に快方に向っているとはいふものの、何分にも六時間に及ぶ大手術の後だから経過にシグザグがあるのは仕方あるまい。ドクターも、気を永く持つて療養に集中するよう励まして下さっている。此処は日本がん研究の中心である。幾つかの共同研究がなされて、世界のがん学界との交流が常になされて居り、現に幾人かのドクター室の名札に



海外留学中と書かれている。外來の廊下には何時も患者で溢れている感じで、若院だつて此処で最初の診療を受けたのは四月十三日だった。がん細胞の生態については、私のような素人が読んだ本によつても「人間のがんはどうしてできるかについてはまだ明快には説明されていない」(日野原重明著「ものの言わぬ臓器との対話」)とあり、「だが真実の話、医師が一番苦心をし、またひしひしと身を感じていることは「がん」の早期発見がいかにむずかしいかという点であり、よほど精密な検診を繰り返さないかぎり「あなたは

大丈夫だ」といふことが出来ないというのである。兎に角、一日も早い快復を念ずる外はない。親戚、友人、先輩其の他、毎日のように見舞いに来て下さつて、その寄書を見ると、実に多方面に亘つて激励を寄せて下さっている。此のあつち心のバックによつて、もとの元気を取り戻す日も近いだろう。病室の窓からは、浜離宮の海辺が見え、近くには朝日新聞、日産本社、東急ホテルの大建築が並び、築地本願寺も近所にある。疲れさせてはならぬのでしばらくは退去するはらわたの悲れり払い 風堂るセンターの上 車月空 飛行船

経過良好 六月二十七日退院



男先生へ
三年 河村さやか
先生しゅじゅつもおわって、ごきげんいかがですか。わたしは元

気でたまりません。いつも月曜日に、楽しみに雪ん子に來ます。どうして楽しみに、雪ん子へ來るといふと、先生今日には來たかなあと思うからです。入院している気持ちには、とてもさびしいでしょうね。わたしは先生の顔が見れないんで、さびしいです。一日もはやく元気な先生の顔が見たいです。



もうすぐだ。屋上で仲良く...

若様へ

本波 光雄
若様その後の御様子如何ですが。順調に御快方に向つていらつしやるとお聞きしておりますが、闘病生活も大



生まれ変わった気分の方もまったく同じで、頭をもたげてくるのはドンチッチだ。一日一刻もうちよつともうちよつとと貪り、ささいなことでもハラを立て、おろかなクチで日が暮れる。ああノまたまた三悪に逆もと：だがそんな患者の私をみて、医師がニッコリ「オヤ、ずいぶん元気がでてきたね。その調子、その調子：」。変で御座居ましよう。処で私達のお経の会は、その後も定例日に集まり、俊隆君、教隆君の御導師で御勤めをしたり、私共だけで勤めたり、若様の書かれたものを讀んだり、みんなで話合つたりしながら、御全快の早からんことのみを皆んなで願つております。お寺はビハラー安らぎの場所です。また御一緒に御勤め出来る日を願いつつ...

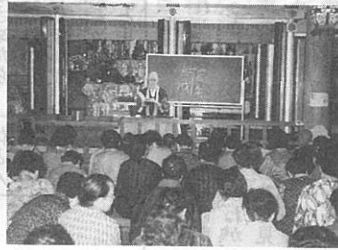
寺

八月

- 一日 お講 石田・板沢・生地
- 九日 一泊聞法 お初夜
- 一〇日 曉天講座
- 一三日 こども盆踊練習会
- 一四日 こども盆踊大会
- 一五日 盆会 盆参り 朝十時
- 一六日 盆会 盆参り 朝十時
- 二八日 雪ん子劇団夏の公演

祠堂会で特別法要

本山御助成会も



七月十四日から一週間にわたってつとめられる恒例の「永代祠堂会」に合わせて、今年もいろいろな特別法要がありますので、ご縁のある方は是非お参り

して下さい。祠堂会とは、寺を護る門徒の皆さん全員の前祖のご法事で、むかしは一カ月間もつとめたようです。しかし最近では一週間、それでも、お満座の日に一度参れば、という方も多く、先の六日間が少々さびしくなっております。そこで総代さんたちともご相談して、昨年から、日替りで、対象をばらばらにして特別法要を合わせてつとめることにしましたら、ことのほか多くの方々が期間中、二度三度とお参り下さり、寺の祠堂経が元気をとりもどした。特別法要ではつきり対象を示してもらうと、おらとの法事だという気になって、参らずにはおれませんか」という声も聞かれて、うれしいことでした。

若はんの本続々...

若院が入院前と入院中に書いた本が、近く三冊お目見えします。一つは「続々お茶の間説法」評判の「お茶の間」シリーズ第三弾で、七月一日発売です。読売新聞連載のプロフィールと、産経新聞の説法と、本願寺新報「赤光白光」欄を一冊にまとめたもの。二冊目は例の「煩惱カルタ本願カルタ」これはおもしろいノ八月

ごろには出来る予定。さらに三冊目は力作「観経王舎城の悲劇」。これは発売は未定ですが出稿済み。そんなこんなで七月二十一日には東京で、退院の祝いと出版記念のパーティが浜美枝さんや、須田開代子さんらの協力で開かれることに。若はん二重のようこび。

善巧寺の常例行事

お寺の学校	毎月 一日・十六日
お雪の子劇団	毎月 第四土曜日
お夢の会	毎週 月曜四時
お花の会	毎月 第二土曜日
お経の会	毎月 第一月曜日
	第一・第三土曜日

本山御助成会 七月十八、十九

戦没者追弔法要 七月十七日午後一時。門徒の戦没者遺族の方はおさそい合わせお参り下さい。

寺族物語者法要 七月十六日午後一時。善巧寺、法輪寺、照行寺の寺族物語者の法要をつとめます。

白鶴会物語者法要 七月十五日午後一時。善巧寺仏婦「白鶴会」の物語者のご家族と、現白鶴会の会員の方はおさそい合わせお参り下さい。

総代会物語者法要 七月十四日午後一時。これまで亡くなられた総代さんのご家族の方と、現総代の方は必ずお参り下さいませ。

見るお経

楽しく、美しく、わかりやすい

仏典物語 王舎城の悲劇

仏典物語 アジヤセとシハダ

ビデオ仏典物語 第六巻・第七巻

企画制作 本願寺 御用金 8月1日より同時発売

日午後一時。下三日講の大御助成が善巧寺を宿寺につとめられます。

内陣法名法要 七月二十日午後一時。例年通り、特別懇志志納者の内陣での焼香があります。なお生前法名の方や、希望法名をまだ申し込んでおられない方には案内が出ておりませんので、ご不審の方は受け付けまでご連絡下さい。

合 掌

ホンコさんまわりが終わり、寺報前号を仕上げ、いよいよ春を迎えるアト、ホッとしたところで、座りすぎと原稿の書きすぎで、痔にでもなったかなあと、裏の石坂先生に診てもらったら、これがなんと直腸ポリープ。それならと富山医科薬科でチョイと手術を出かけてみたら、これが、かなり進んだガンとわかり、ビックリギョウテン。人工肛門の手術になりそうとわかって、急ぎよ、東京の国立がんセンターへ。五月十七日、その道の権威、北條慶一外科医長の執刀で、至れり尽せりの大手術は成功し、以後一カ月半、体の回復、再発の予防の療養生活を送り、六月二十七日退院しました。

門徒の方々や、お寺の学校の子供たち、知事さんからも直々のお見舞をいただいたりして、本当にありがたいございました。ごめんなさい。退院まであと少しというところで寺報のしめ切り。この寺報は病院のベッドでなんとか仕上げました。祠堂会で会いましょう。

